

言語に対する行動

Björn H. Jernudd

(和訳ニミラー成二)

- 講演者……Björn H. Jernudd (インディペンデント・リサーチャー、元香港バプテスト大学)
- 司 会……サウクエン・ファン
- 使用言語……英語

トークは必ずどこからか生まれている。言語学の重要な研究課題は、トークが脳からどのように出てくるかを説明することである。人がことばを生成し、文法能力によってことばを整理するならば、デイスコースに対する調整のメカニズムがあることもっともだろう。言語管理がとらえようとするメカニズムはまさにこれである。さらに言語管理は、言語を産出する際に私たちが行う計画的行為、およびその行為がことばづかいにどのように関わっているのかも探ることができ

る。人が自分のことばを管理しているという例を紹介しよう。私が英語を、母語以外の言語として学習している時のこと

ある。私は (I was と言うときに) 一般的な規範で適切とされている [w] の音を発音するところを、[v] の音で発音していたことに気づいた。そこで不適切である [v] 音の発話を自分で中断、自分の発音を再調整し、自分のことばを [w] 音に調整して発話したわけである (つまり: [ajv-wɔz] (I was))。

デイスコース管理は、発音のささいな誤りのみに注目するわけではない。コミュニケーション、もしくは私がハッピーコミュニケーション (happy communication) とよぶものを成し遂げるためには、様々な要素が必要となる。デイスコース管理とは、人と人との間で行われる継続的な意味のやり取りを維持するために、デイスコースの創造、再創造をすることである。以下に例を挙げて見ていこう。

以下の例は香港の会社で品質管理の専門家が、会社のミーティングにおいて中国の織物工場について報告している。マネージャーは専門家を言語的にサポートしており、専門家はそのサポートを活用しながらやり取りを行っていることが分

かる。

例1

Director: How d'they cue the print?

マナーシヤ: プリントをキュウするの?

Specialist: Er...

専門家: えと...

Director: Acid dye?

マナーシヤ: 酸性染料?

Specialist: Yes they have keep + a... a machine to

cue the fabric + + How to say?

専門家: そう持っているんです+え...布をキュウす

る機械を+何て言うんです?

Director: What's the print process? They steam it?

マナーシヤ: プリントの過程はどうなってる? スチー

ムするの?

Specialist: Yes they steam it yes just like baking right?

This is circle right?

The fabric is fit inside and then a pressure

steam —... something like that

専門家: そうです、スチーム、はい、焼くみたいな

ものですよ? これは環ですよ?

その中に布がセットしてあってスチームを
押しあてる—...そんな感じですよ

Director: — Oh Oh I know

マナーシヤ: — ああああ分かるよ

(Jenny Chow (1996: 84) A Study of Communication in
a Textile Quality Management Services Company (修士論
文)より引用)(日本語訳は訳者による)

ディスコース管理の流れは図1のように捉えることができ
るだろう(単純、もしくは最も一般的なオンライン管理の場
合)。

言語管理のもう一つの側面は、言語のシステムの面と、
ディスコースにおける言語使用の面に対し、明らかに、また

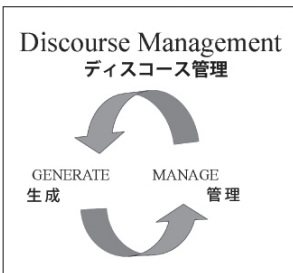


図1

慎重に注意が払われていることである。私たちが自身もしくは他者の言語行為について考えるときは慎重さは、ディスクコース管理につながる。手頃なラベルをつけるとすれば、オンライン言語管理がいいだろう。なぜなら私たちは言語そのものについて抽象的に考え、また話すことができるからだ。

このオンライン言語管理の最も基本的な理由は、人が「自分自身」と、「言語」と呼ばれる「モノ」、そしてその「モノ」の典型である「自分の言語」を理解したいと思つてゐることである。加えて、相互行為の流れの中には必ず困難が生じることも挙げられる。人が話をしてゐる時にこのような困難が生じた場合、(自身もしくは他者の)最初、もしくはそれに続く話順において管理を行う。これらの「問題」は、それ自体を相互行為の流れの中で取り上げるか否かに関わらず、討論や解決の対象となる場合がある。一般的な言い方をすれば、参加者は産出されたスピーチに対して何らかの留意をする。例えばおかし、不適切だ、無礼だ、文法的に逸脱している、何かが暗示されている、革新的だ、というような留意である。そして留意されたこと自体が話のトピックになると、その問題を包括的に理解する必要があるのである。それにも関わらず、言語学者たちは(上述のような「問題」ではなく)発話の構築方法に焦点を当て続けた。そのため、彼らがその学問的努力を、言語管理でいうところの言語規範、す

なわち規範自体の考察と、規範からの逸脱のみに注いても許されたわけだ。

私は一九六三年に故 Charles Ferguson 氏の授業に参加していた。彼は私たちに、共通する言語がない場面において人ほどのように話をするかを考える課題を与えた。つまり、映画「ターザン」におけるターザンとジェーンのような状況である。授業で言及された重要な点は、人間が意味のある相互行為を行うとそのプロセスの中で、あるルーティンを形成するということである。そのルーティンは規範となる可能性を持つものであり、ハッピーコミュニケーションを形作るものでもある。

コミュニケーションが行われる接触場面に参加している人にはどのような人がいるだろうか。例えば異なる言語背景を持つ話し手と相互行為を行う飛行機の客室乗務員や、言つてしまえば全ての国外居住者などがそうである。この人々は、ディスクコースの「第三の道」を切り開いている。すなわち、これからコミュニケーションにおいて生じる不適当な点を予想し、回避するのである。

ここでいったん話を大きく変えてみよう。言語は、それを見自分たちのものにする人々によって作られてきた。近代史を見てみるとたくさん例を見つけることができる。

植民地時代以降のマレーシアやインドネシアでは、政府が



Jernudd 氏



司会のファン先生

国語を形成、標準化するために、言語及び文学庁 (the Dewan Bahasa dan Pustaka) や、言語センター (the Pusat Bahasa) など設立した。どちらの国においても、国語の一般的な用法を制定することに成功している。二つの国語は非常に似ているが、様々な要因により微妙に異なっている。しかし両言語とも政府による様々な政策によって標準化されており、彼らが思い描いた国家を作るために取り組んだ、計画的で組織的な長期的管理の結果であると言えるだろう。異なる管理がさ

れていたものの、これはイスラエルにおけるヘブライ語と同様の結果であり、歴史上でもまれなケースである。

言語アカデミーについても知っておくべきであろう。‘アカデミー’は、言語を管理する多くの機関の一つである。最初のアカデミーは、五〇〇年以上前のヨーロッパで作られた。マレーシアやインドネシアの機関は、その役割からすると現代のアカデミーであるとも言えるだろう。スウェーデンにおいても一八世紀に北ヨーロッパにおける文化的独立を目指し

て、一七八六年にアカデミーが設立された。その憲章二二条と二三条から、アカデミーの意義について述べられている部分を以下に抜粋する。

スウェーデンのアカデミーは今も存在し、言語管理に関する、特定の限定的な役割を果たしている。最も重要な出版物として、ワードリスト(SAOL)やワードブック(SAOB)、またスウェーデン語の包括的な文法書(Svenska akademies grammatik, 2010)などがある。アカデミーの他にもスウェーデン語を管理する組織は存在しており、その中でも主要なものは、スウェーデン語用語法センター(Swedish Centre for Terminology, TNC)や、スウェーデン言語評議会(Language Council of Sweden, Institutet för språk och folkminnen; www.sprakochfolkminnen.se)などである。その他のものは以下のアドレスにリストアップされている。
www.svenskaspaketet.nu

政府による言語管理組織は、前世紀の大半をスウェーデン語の洗練に尽力してきた。ところがこれは、EUに加盟した直後から大きく変化することになる。EUはマイノリティ言語も、(国家の)言語として規定することを求めたのである。これはスウェーデンにおける言語政策の変化を引き起こした。すなわちスウェーデン語を、国家の「主要な言語」として定めることとなったのである。これは、それ以前の状況において

XXII §

- Academiens yppersta och angelägnaste göromål är, at arbeta uppå Svenska Språkets renhet, styrka och höghet, så uti Vettenskaper, som serdeles i anseende til skaldekunsten och Vältaligheten uti alla thes tilhörande delar, jemväl uti then, som tjenar at tolka the Himmelska Sanningar.
- ... to work on the purity, strength and dignity of the Swedish Language, in the Sciences and especially in regard to Poetry and Rhetoric in all their parts, as in the part which aims at interpreting Heavenly Truths.
- 絶対的真理を解釈する(神学の)分野と同じように、(言語アカデミーは)語科学、とりわけ、文学、修辞学のすべての分野においてスウェーデン語の純粋性、健全性、尊厳性に従事する(日本語訳は訳者による)。

XXIII §

- Ty åligger äfven Academien at utarbete en Svensk Ordbok och Gramatica, jemte sådana Afhandlingar som bidraga kunna til stadga och befordran af god smak.
- ... to produce a Swedish Wordbook and Grammar, and such Dissertations as contribute to the stability and enhancement of good taste.
- (言語アカデミーは)スウェーデン語の単語帳や、文法や、気品の安定と促進に寄与するような論述を作成する(日本語訳は訳者による)。

は必要とされていないことであった。以下のサイトはスウェーデンの言語政策に関する情報へのリンクである。

www.sprakochfolkminnen.se/om-oss/kontakt/sprakradet/om-sprakradet/in-english.

これ以降、スウェーデン語を管理する機関には様々な質問が寄せられるようになっていく。例えば、「どの用法が正しいのか」、「どちらの用語を使えばいいのか」、「英語やその他の言語からの借用語は使用してもいいのか」などである。残念なことには、これらの質問が生じる元となったディスコースは記録されていない。ここでの言語問題（上記の質問）や、これらの問題を機関に質問するという行為をもたらした不適切な点とは何だったのかを知るためには、その情報が必要である。その問題から（元の）ディスコース上での不適切な点は説明されるのだろうか。あるいは何かしらの非言語的な関心が反映されているのだろうか。以下はその質問をリストしている（スウェーデン語の）サイトへのリンクである。

www.tnc.se/component/option,com_quickfaq/Itemid,40/cid,1/view/category/

用語法や、一般的な、言語については以下を参照のこと。

www.sprakradet.se/GetDoc?meta_id=1950.

日本の状況については「言語生活」や「国語国字問題」などを参照されたい。

私が仕事をしたチームではその国における言語問題を知るために様々な国の新聞を分析してきた。以下の分類は一九八六年に行った三か月におよぶインドのマハラシュトラ州マラティでの新聞調査によるものである。

インド、マハラシュトラ州：新聞における言語に関する記述

- ・ 国家の言語問題
- ・ 地方言語と地方的慣習
- ・ 言語的マイノリティの問題
- ・ 言語と州の境界
- ・ 言語対立の拡大
- ・ 言語サービスやスキルの要求
- ・ 言語障害
- ・ 言語教育

正しい言語

- ✓ 正しい発音
- ✓ 正しい文法
- ✓ 正しい語彙
- ✓ 名前には何が込められているか？
- ✓ 正しい文字

- ✓ 規範に対する明白な言及と評価の原則
- ✓ 接触訂正と翻訳
- ✓ コード・ミキシングとコード・スイッチング
- ✓ スピーキング
- ✓ リーディング

このような問題は、どこから生じているのか知る必要があるだろう。いくつかの問題はデイスコース上から生じる。オンラインで言及された何らかの不適な点が、デイスカッションに反映されて焦点があてられる場合である。すなわちデイスコース上で不適当な点だったものが「言語問題」となるわけである。またいくつかの問題は、個人の信念から生じ、デイスコース上に「還元」される。これも一つの「言語問題」となる。例えば、外国語の借用語を使用しないという個人の原則などが考えられる。このような原則を持つ者は、他の人が使用している借用語を使用せず、代わりにスウェーデン語による表現を探すだろう。

これらデイスコース上の不適当な点(オンライン)や、明らかとなった問題(オフライン)の要因を見つけ、分類し、記述するためにはモデルが必要である。このモデルによって様々な問いに答えることができるようになるのである。我々は言語管理理論に関する研究によってこれを探究してきた。図2

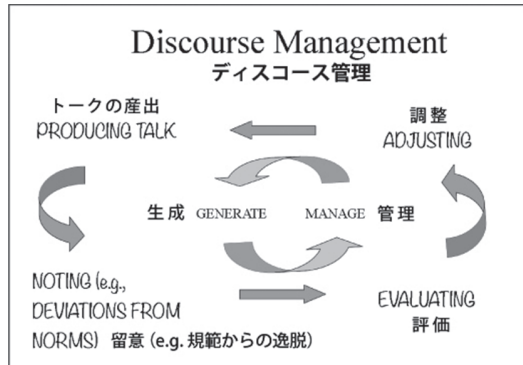


図 2

と図3が言語管理の分野における研究者が使用するモデルである。

図3は継続的な相互行為において何が起きているかを示すものである。言語的な相互行為において継続的にコミュニケーションがなされる限り、コミュニケーションの参加者による調整が終了することはない。また、生成(産出)されたものが相互的な調整を受けるためには、それが留意されなければ

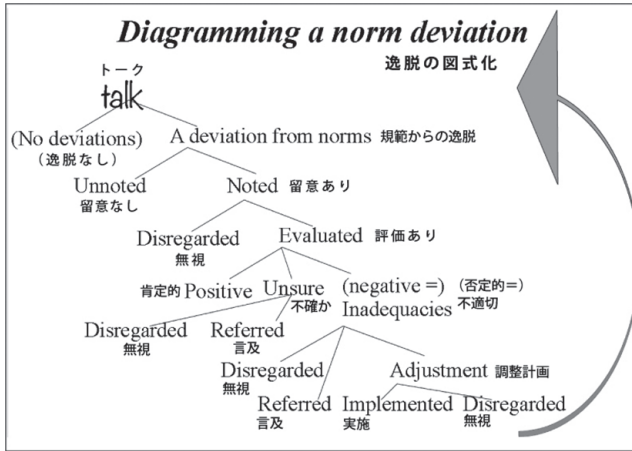


図 3

ばならない。生成されたものが留意されても、必ずしも相手からフィードバックを受けるわけではなく、明確な理由がなければ無視される。生成されるものが生成される前に、生成者によって事前に調整される場合もある。留意や評価、調整



質問をする学生

の対象となるのは、期待(必ずしもそうではないが、多くの場合普通だとされているものであり、規範と呼んでもいいかもしれない)から逸脱したものである。人は、話をしている時に起こったことを、自然とその話に反映している。すなわち、留意、評価、調整したものの自体がトピックとなることがあるわけである。言語管理においてはそのような状況を、言語問題として扱う。言語問題について考えてみてほしい。言語問題はどこから生じ、どのように解決されるのだろうか。これを考える時、言語管理のモデルは必ず役に立つと信じている。